

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00735

研究課題名（和文）ロシア・中東欧の現代日本語教育史の記述－社会主義時代からの変遷を中心に

研究課題名（英文）Description of the history of Japanese language teaching in Russia and Central Eastern Europe:focusing on the changes from the socialist era

研究代表者

小川 誉子美（OGAWA, Yoshimi）

横浜国立大学・国際戦略推進機構・教授

研究者番号：50251773

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：社会主義時代のソ連は多数の日本研究者を輩出したが、本研究はそれを支える日ソの各大学の日本語教育の体制について口述資料をもとに明らかにした。戦間期の日ソ間の政治的緊張の高まりは、ソ連の日本語人材の育成を加速させ、その勢いは冷戦期も衰えることはなかった。一方、日ソ共同宣言調印（1956）後も両国の交流が進まない中、大阪外国語大学ロシア学科や東海大学はそれぞれの目的でソ連の日本語教育に関わり、人的交流を促進した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語教育の歴史には、言語人材の需要と国家間の緊張との間に大きな相関があることを示す事例が多数ある。社会主義時代のソ連における日本語教育もその一つである。本研究は、これまで断片しか知られていなかったソ連の日本語教育史の空白を埋めるとともに、日本の二つの大学が行った日本語教育が、従来とは異なる視座から安全保障をとらえていたことを示した。この成果は、あらゆる国際環境で教える言語教員養成の場において、複眼的視野育成のための素材となる。

研究成果の概要（英文）：The USSR produced a large number of Japanese researchers during the socialist era, and this study uses oral documents to clarify the system of Japanese language education at universities in the USSR and Japan that supported this. The growing political tensions between Japan and the USSR during the interwar period accelerated the development of Japanese-language personnel in the USSR, and this momentum continued unabated during the Cold War. Meanwhile, while exchange between the two countries did not progress after the signing of the Soviet-Japanese Joint Declaration (1956), the Russian Department of the Osaka University of Foreign Studies and Tokai University were involved in Soviet Japanese language teaching for their own purposes and promoted personal exchange.

研究分野：日本語教育史

キーワード：日本語教育史 冷戦時代 旧ソ連 レニングラード大学 日本人講師 大阪外大 東海大学 ハンガリ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

外国語人材の育成が総力を挙げて空前の規模で行われたのが、第二次大戦下の連合国の日本語教育だった。これは、外交、特に有事の際には、相手国の正確な情報把握がいかに重要であるかを示す例であろう。しかし、これは短期間で終了した。一方で、冷戦時代のソ連にすぐれた日本語通訳が少なからずいたことや、旧社会主義圏からソ連に留学した人々の帰国後の活躍に関する断片的な報告はある。しかし、日本研究者の育成が長期にわたって行われた事例として実態が報告されることはなかった。ソ連には国際交流基金による日本語教員の派遣がなかったため、まとまった記録は残されていない。

2. 研究の目的

本研究は、ロシア・中東欧地域を対象に、社会主義時代から現代につながる当地の日本語教育の展開を記述するものである。ソ連の日本語・日本研究は第二次世界大戦前から高い水準を誇りその伝統は、1970年代後半以降東欧圏にも引き継がれた。当地での日本語・日本専門家の養成体制や教育現場の視点に注目し、日本側の関わりについて、多方面から考察する。

3. 研究の方法

全体像を明らかにするために、一次資料として、当時の教師や学習者の方々から寄せられた口述資料および文書による回答を用いた。ロシア側の公文書を用いてクロスチェックを行う予定であったが、これは実現せず、日本側の文献を用いた。

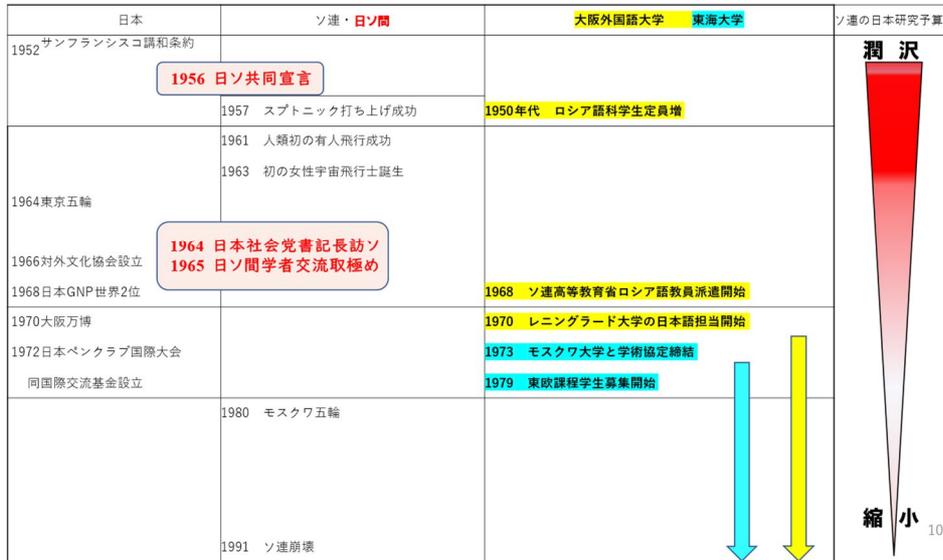
4. 研究成果

東洋学の伝統あるレニングラード大学東洋学部では、日本研究者が継続的に輩出されていた。日本語母語話者教員が必要とされ、交流のなかった日ソ共同宣言(1956)調印以前には、旧樺太在住のソ連国籍の日本語母語話者(1970年ごろまで)が、1970年以降は、大阪外国語大学のロシア専門家のべ18名がレニングラード大学で日本語を教えた。これは、現地での研究を強く望む大阪外国語大学ロシア研究者が、ソ連教育省との間でロシア語・日本語教員の交換を取り付け、彼らがレニングラード大学で日本語教育を担当するようになったのである。当地での日本語教育は、日本のロシア語教育、ロシア研究の推進の必要性から開始されたものであった。

一方、東海大学は、教員や学生を派遣する一方で、モスクワ大学や東欧圏の学生を受け入れ集中的な日本語教育を行っていた。これは、社会党右派議員であり戦前のヨーロッパに留学した経験を持つ総長が、日ソ間の安定した国家関係の樹立こそ日本の総合的な安全保障にとっても不可欠な課題であるとの考えから実施したものであった。冷戦時代の日ソ間の動向と両大学が本制度を作り上げていく過程を示したのが表1である。

表 1

日ソ関係と両国のロシア語・日本語人材の育成



東欧諸国もそれぞれの東洋学研究的伝統や対日関係を反映し日本語講座を開設していた。ソ連留学から現地に戻った研究者が教壇に立つ国、また、東洋語研究の伝統の中で戦前より日本人留学生を迎え、戦後の国交断絶期も特別なルートで当地に留学した日本人が日本語を教えていた国もあった。後者はハンガリーである。日本人講師の中には、帰国後にハンガリーの言語や文化について生涯にわたり精力的に研究し日本に紹介した人物もいた。往来が制限されていた時期に当地の教壇にたつという経験が、帰国後の長きにわたる研究活動をもたらした。日本語教師たちの活動を示したのが表2である。

表 2

		ハンガリーおよび近隣		日本人教師 (教授年)		日洪文化関係著作
1900~	1904~5	日露戦争	1902	白鳥庫吉	1905 1906	日本語教科書(洪) 大日本(洪)
1910~	1914~9	第一次世界大戦	1914	脇水鉄五郎		
1920~	1920	トリアノン条約	1921 1923	外山高一(2) 今岡十一郎(9)	1921 1927 1927	ツラン同盟 日本語講座開始 ツラン協会 同 高松宮ハンガリー訪問
1930~			1937?	吉川兼光 岡正雄	1935 1935 1938	ツラン民族運動とは何か(今岡) 三井高陽 ハンガリー文部省へ寄付 日洪文化協定
1940~	1941 1949 1949	第二次世界大戦 枢軸側 ハンガリー人民共和国 東西ドイツ成立	1941 1942 1943	徳永康元(2) 菅博雄 武井宗夫	1942 1944	ハンガリー語4週間(今岡) ハンガリー語小辞典(今岡)
1950~	1956	ハンガリー動乱	1958	----- 羽仁協子(9)	1959	国交回復
1960~					1960 1968 1969	公使館設置 ハンガリー子どもの遊びと音楽(羽仁) ハンガリー文化史(今岡)
1970~					1973	ハンガリー語・日本語辞典(今岡)
1980~					1982 1989	ブタペストの古本屋(徳永) ブタペスト回想(徳永)
1990~					1993 1996 2004	子どもと音楽(羽仁) 大阪外国語大学ハンガリー語科開設 遠くからきた鏡 異文化と物語心理学(羽仁) ブタペスト日記(徳永)

冷戦
入国困難

帰国後
洪に
関する
旺盛な
執筆活動

活
発
な
交
流

断
絶
・
不
自
由

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 小川誉子美	4. 巻 16
2. 論文標題 冷戦時代のソ連の日本語研究・日本語教育	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 178 188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川誉子美	4. 巻 675
2. 論文標題 漢字の記憶法、16世紀にさかのぼる	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Romazi no Nippon	6. 最初と最後の頁 6 9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小川誉子美	4. 巻 18
2. 論文標題 妄想インタビュー：外山高一先生	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ウラリカ	6. 最初と最後の頁 51 56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小川誉子美	4. 巻 674
2. 論文標題 ハンガリーで日本語とモンゴル語を教授 外山高一の活動	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Romazi no Nippon	6. 最初と最後の頁 29 33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小川誉子美	4. 巻 35
2. 論文標題 ハンガリーの日本語教師－1910年代から1960年代を中心に－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語教育連絡会議論文集	6. 最初と最後の頁 30-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小川誉子美	4. 巻 16
2. 論文標題 冷戦時代のソ連の日本語研究・日本語教育	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 178-188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川誉子美	4. 巻 34
2. 論文標題 冷戦下旧ソ連の日本語教育史の一断面 日本 ¹ の国立大学の20年に及ぶ試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語教育連絡会議論文集	6. 最初と最後の頁 22 31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小川誉子美	4. 巻 4
2. 論文標題 ソ連の日本語研究・日本語教育－レニングラードを中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 新世紀人文学論究	6. 最初と最後の頁 237-250
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川誉子美	4. 巻 33
2. 論文標題 ソ連の日本語教師岸田泰政	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本語教育連絡会議論文集	6. 最初と最後の頁 7-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川誉子美	4. 巻 24
2. 論文標題 日本語学習と社会背景 19世紀のフランスとイタリアの事例から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ヨーロッパ日本語教育	6. 最初と最後の頁 459-465
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川誉子美	4. 巻 3
2. 論文標題 イタリアの日本語教育と日本人教師の活動ー1930年代から1950年代の日伊交流を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 新世紀人文学論究	6. 最初と最後の頁 69 - 84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川誉子美	4. 巻 -
2. 論文標題 日本におけるフィンランドの紹介ー戦後20年間の活動内容と意義	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本とフィンランドの出会いとつながり	6. 最初と最後の頁 171 - 184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoshimi OGAWA	4. 巻 -
2. 論文標題 Suomea tunnetuksi tehneet japanilaiset oppilaineen kahdella sodanjälkeisellä; vuosikymmenellä.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Suomi ja Japani. Kaukaiset mutta laheiset	6. 最初と最後の頁 164-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川誉子美	4. 巻 31
2. 論文標題 海外の日本語教師と学習者の活動に関する一考察ー北欧フィンランドの事例から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語教育連絡会議論文集	6. 最初と最後の頁 93-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川誉子美, 重盛千香子	4. 巻 32
2. 論文標題 ウィーンの研究・日本語教育に携わった人々 戦間期を中心に -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語教育連絡会議論文集	6. 最初と最後の頁 23 - 28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 田中祐輔・平高史也・小川誉子美・川端祐一郎
2. 発表標題 「危機」における日本語教育のレジリエンス 感染症・国際間摩擦・災害と対峙した100年と未来への示唆
3. 学会等名 日本語教育学会春季大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小川誉子美
2. 発表標題 邦字紙に見るハンガリーの日本語教師
3. 学会等名 第35回日本語教育連絡会議（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小川誉子美
2. 発表標題 冷戦時代の「交換制度」と日本人講師の系譜ーレニングラード大学と大阪外国語大学の場合ー
3. 学会等名 日本語教育史研究会2021年度研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小川誉子美
2. 発表標題 ドイツと日本語、横浜、人物秘話～17世紀から第2次世界大戦期までを辿る～
3. 学会等名 日独交流160周年記念 講演会、横浜日独協会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小川誉子美
2. 発表標題 ソ連時代の日本語教師とその資料について
3. 学会等名 第31回日本資料専門家欧州協会年次大会（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小川誉子美
2. 発表標題 冷戦時代の日本語教育史 日本とソ連・東欧間の交流協定に注目して
3. 学会等名 第34回日本語教育連絡会議（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小川誉子美
2. 発表標題 旧ソ連の日本語教育
3. 学会等名 第33回日本語教育連絡会議（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小川誉子美
2. 発表標題 デジタルアーカイブでのぞく自宅で日本語教育史研究
3. 学会等名 日本語教育史研究会2020年度ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小川誉子美, 重盛千香子
2. 発表標題 戦間期ウィーンの日本語教育ード・チョンホ、岡正雄、A.スラヴィークをめぐって
3. 学会等名 第32回日本語教育連絡会議（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小川誉子美
2. 発表標題 日本語学習と社会背景 19世紀のフランスとイタリアの事例から
3. 学会等名 第23回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小川誉子美
2. 発表標題 日本におけるフィンランド 1950年代を中心に
3. 学会等名 Suomen ja Japanin diplomaattisuhteiden 100-vuotisjuhlaseminaari（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 小川誉子美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 413
3. 書名 蚕と戦争と日本語	

1. 著者名 小川誉子美	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 205
3. 書名 開国前夜、日欧をつないだのは漢字だった 東西交流と日本語との出会い	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------